

子どもの「死」の概念形成のきっかけとなる「出来事」の探究

加藤 良 則*
庄 司 一 子**

問題の所在と本研究の目的

「死」をめぐる子どもたちの状況

子どもたちにとっての「現実の死」は、もはや身近な存在ではなくなってしまうとの指摘がある（西本，2000 他）。この指摘は 20 年余り前のものであるが、今日の子どもたちにとっても状況はまったく変わっていないと言える。その原因として平山（1985）は、子どもが祖父母の臨終場面に立ち合う機会が減少したことを挙げ、その背後に核家族化や「病院死」を指摘した。同様に梶田（2006）も、現代は大人も子どもも「いのち」の実感が希薄化していることを挙げ、その背景要因として直接体験が乏しくなったこと、核家族化の進展により死の場면을体験しない状況が生じていることを挙げている。

一方、子どもたちにとって日頃から「見慣れた死」（西本，2000）があるとの指摘もある。それは、テレビドラマや映画、アニメ、漫画、ゲーム等に出てくる「うその死」、いわゆる「仮想死」である（西本，2000）。「仮想死」については、平山（2000）も生命感覚が急速に希薄化している原因として、これを指摘している。最近はこの状況がますます深刻化しており、特に小型化・軽量化した電子機器の急速な普及により、日常生活のいたる所で子どもたちはバーチャル・リアリティによる「仮想死」を容易に目にするようになった。

このような状況の中で、青少年が見ず知らず

の人を突然殺傷する事件が発生し、社会に大きな衝撃を与えることがある。動機は「人を殺してみたかった」「殺すのは誰でもよかった」などと報じられることが多い。このような事件は、多くの人々に恐怖心を与えるだけでなく、何故そのような気持になるのか強い疑問も抱かせる。現代の青少年の多くが幼い頃から日常的にバーチャル・リアリティを体験し、「仮想死」を繰り返し目にしている状況を考えると、一部の青少年の内面に「現実の死を確認してみたい」という欲求が高まり、それを抑制できず犯行にまで及んでしまった、と推察することも可能ではないだろうか。また、全国の小・中学校においても、友人を刃物等で殺傷するという痛ましい事件が発生している。廣井（2006）は、このような事件を受け、ごく「普通の子」がある日突然「殺人事件」を起こすという現実があると指摘している（p.898）。

一方、文部科学省（2020）の調査結果による「自殺の状況」を見ると、全国で毎年 200 名以上の児童生徒が自ら命を絶っており、平成 30 年度（2018 年度）にはその数が 300 名を超えた。さらに、「コロナ禍における児童生徒の自殺等に関する現状について」（文部科学省，2021）によると、令和 2 年（2020 年）に自殺した児童生徒の数は 479 名に急増したことが報告されている。特に、中学女子は前年の 37 名から 62 名に、高校女子は 67 名から 138 名にそれぞれ大きく増えた。コロナ禍で、周囲の人々と円滑なコミュニケーションが取れなくなったり、感染予防のため周囲との関わりが減ったりして、孤独感を深めた子どもが一人で悩みを抱え自殺

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程

** 筑波大学人間系

にまで追い込まれた、という状況も推察される。背後に、「自殺したい」という願望を抱くいわゆる「自殺予備軍」(宮川, 1987)の存在も考えられる。現代の子どもたちには、「死」に対する客観的な認識が十分に形成されないまま、「死」の道を選択する傾向も推察されるのである。

しかし、我が国では、ここ四半世紀だけでも各地で発生した大地震、台風、集中豪雨などの自然災害によって、毎年のように尊い人命が失われている。また、交通事故や殺傷事件などによって、痛ましい死亡事例も頻発している。ある日突然、身近な命を奪われ、深刻な喪失感に陥ってしまう子どもが数多くいる。このような子どもたちは、「現実の死」を身をもって体験する。もし、子どもがバーチャル・リアリティによる「仮想死」しか知らなかったとしたら、「現実の死」はあまりにも衝撃が大きく、受け入れ難いものとなる。

加藤・庄司(2018)が大学生およそ500名を対象に行った「死別体験」の調査によれば、高校卒業までに実に92.7%が「死別体験有り」と回答した。その内訳は、主に「同居はしていなかったがよく知っている親せきの人が亡くなった経験」(68.3%)、「家族や学校などで特に可愛がっていた動物が死んだ経験」(42.9%)の比率は高かったが、「同居していた家族が亡くなった経験」(18.9%)の比率は低かった。この点は平山(1985)の指摘とほぼ一致していた。ところが、「親しくしていた同級生または先輩や後輩が亡くなった経験」(19.9%)、「学校(幼稚園や保育園を含む)の先生が亡くなった経験」(16.9%)の比率も意外に高く、児童生徒の5~6人に1人が高校卒業までに学校生活に関係のある知人を亡くした経験を有していた。前述のように、現代の子どもたちは「仮想死」の体験が多いと指摘されたが、実際には様々な死別を体験していることが推察されたのである。

子どもの「死」の概念の発達

子どもの「死」の概念の発達に関する先行研究は多数あるが、ここでは代表的なものを幾つか選び、子どもがいつ頃からどのように「死」の概念を発達させるのか考えてみる。

まず、Nagy(1948)による子どもの「死」の見方に関する調査研究がある。Nagyは、ブダペストとその周辺に住む3歳から10歳までのこども378人(男子51%,女子49%)を対象に、「子どもにとって死とは何か」について調査した。調査方法は、作文、絵、話などであった。その結果、子どもたちの死に対する見方は、発達段階別に三つに大別されるとした。第一段階は3~5歳の子どもたちで、決定的な死は存在しないとみる段階、第二段階はおおよそ5~9歳の子どもたちで、死を擬人化する段階、第三段階はおおよそ9歳以上の子どもたちで、死を肉体的活動の停止と見る段階である。これらの結果を踏まえ、Nagy(1948)は、子どもたちはおおよそ9歳以上になるとそれまでのアニミズムが薄れ、死は肉体活動が停止する、一度死んだら元に戻らない、死は我々すべてに起こるものであり避けることはできないという現実的・客観的な認識を持ち始めると考えた。これらは、「不動性」「不可逆性」「普遍性(不可避性)」と言い換えることも可能と考えられる。

Piaget(1964/1968)は、人間の思考の発達を「感覚運動的時期」「前操作的時期」「具体的操作期」「形式的操作期」の4つの段階に区分した。Piaget(1964/1968)が提唱した4段階の思考の発達について、勝俣(2005)は、『死生観』は具体的操作の時期から形式的操作の時期において発達することが推測されると述べている(勝俣, 2005, p.523)。つまり、子どもたちは11~12歳頃になると、それまでのアニミズムから次第に抜け出し、「死」に対して理論的・客観的な説明ができるようになってくると推測された。

我が国では、1983年に東京都立教育研究所が、「子供の『生と死』に関する意識の研究」の中でアニミズムについて述べている。調査時期は1981年、調査対象は幼稚園児~中3の全学年園児児童生徒計1,873名(男子936名,女子937名)、調査方法は幼稚園児~小3が面接法、小4~中3が質問紙法であった。この報告書(東京都立教育研究所, 1983)によると、アニミズムの残存については、小3が転換期と考えられ、

女子の方が男子より残存の傾向が強かった。東京都立教育研究所以外では、佐藤・齋藤(1999)が、小1～小3(N=629)を対象に「死の意識および認識」について調査した。その結果、アニミズムは小3でも残存率は高く、特に女子にその傾向が強くと認められ、男子は学年が上がるにつれてわずかながら減少していく傾向が認められた。

次に、「生命は有限である」という考え方について、東京都立教育研究所(1983)は次のように報告している。園児は自分の場合より動物の場合の方が「いつか死ぬ」とするものが多く(自分52.4%, 動物78.1%), 小2になると「動物も自分もいつかは死ぬ」とする比率がほぼ同率(自分97.0%, 動物95.6%)だったことから、「生命は有限である」という考え方は小2以降において確立すると推測された。東京都立教育研究所以外では、佐藤・齋藤(1999)が、小2, 小3のほぼ80%が「生命の有限性」について認識を確立させていると報告している。また、仲村(1994)は、Nagy(1948)の研究を参考に、3歳から13歳までの男女205名の子どもたちを対象とした死に関する個別面接を行った結果、9～11歳になると全ての子どもが「誰でも死ぬ」と普遍性について回答したと報告している。

さらに「死後の世界」の考え方について、前掲の東京都立教育研究所(1983)は次の報告をしている。小4～中3までの児童生徒を対象に「人間は死ぬとどうなりますか」と尋ねたところ、小4～小6では「天国や神様の所へ行く」と回答したものが過半数を占めたのに対し、中学校段階になると「ほかのものに生まれかわる」などの再生型や復活型の比率が増加した。これらの比率は、男子よりも女子に高く、死後の世界に夢や願望を見出す傾向が強いように思われた(東京都立教育研究所, 1983, pp.14-15)。東京都立教育研究所以外では、小幡・入谷・木村(2000)が、中学生(N=806)を対象に「死」に対する感じ方や考え方に関する調査研究を行った。結果は、「死後の世界」についての認識について「何もかも消えてしまう」との回答が男子で44.0～53.1%と高かったが、女子は「天国

に行く」との回答が多かった。「死後の世界」に再生型や復活型の回答が多いことについて、前掲の仲村(1994)は「諸外国の先行研究と比べて違っていると思われる点は『生まれかわり思想』であった」(p.68)と述べている。

本研究における子どもの「死」の概念形成の課題と定義

以上のことから、子どもの「死」の概念形成に関しては、子どもがおおよそ10歳前後になるとそれまでのアニミズムから抜け出し、「死」に対して現実的・客観的に認識できるようになってくることが考えられた。また、Nagy(1948)の指摘に基づく「不動性」「不可逆性」「普遍性(不可避性)」の3つは、子どもの「死」の認識を知る上で重要な捉え方であると考えられた。これらのうち、「不動性」「不可逆性」の2つは個別の「死」の物理的・具体的な事象を捉えることによって認識されると考えられたが、「普遍性(不可避性)」は広く一般的な事実の認識がなければ成り立たないものであり、観念的・抽象的な意味合いが強くなると推察された。したがって、子どもが「死」を現実的・客観的に認識しているかを知るには、「普遍性(不可避性)」の認識を有しているかを問うことによって判断することも可能と考えられた。また、特に子どもを対象とした検証では、「不動性」「不可逆性」の2つは「死」に関する具体的なイメージを抱かせる恐れがあり、倫理上重大な問題を生じさせることも懸念された。一方、「普遍性(不可避性)」は、前述のように死は我々すべてに起こるもので決して避けることはできないことを意味している。つまり、「普遍性(不可避性)」は、東京都立教育研究所(1983)が調査した「生命は有限である」とする考え方と基本的には同義であると捉えることが可能と考えられた。「生命は有限である」ことに関する子どもの認識については、仲村(1994)、佐藤・齋藤(1999)、伊藤(2004)などの調査報告もあった。これらは、いずれも子どもが「生命は有限である」と現実的・客観的に認識する年齢がいつ頃かを問う研究であった。

では、アニミズム後の11～12歳に達した子

どもたちの何割程度が、「生命は有限である」ことを現実的・客観的に認識しているのか。「死」を全く認識していない子どもも存在するのか。また、子どもがこれまでに「生命の有限性」を認識した経験を有しているとするれば、最初に認識するきっかけとなった「出来事」の経験は、いつ頃どのようなものであり、その後の日常生活で「有限性」を意識している頻度はどの程度なのか。管見の限り、これらの疑問に対して明確に報告されている調査研究は見当たらなかった。

そこで本研究では、Nagy (1948) の指摘に基づく「死」の「普遍性 (不可避性)」の捉え方を基盤に据え、現代の子どもがこれまでに「生命は有限である」ことを現実的・客観的に認識した経験に関する上記の疑問の一つずつを検証し、今後の死生に関わる教育に少しでも有効な知見を得ることを目指すことにした。また、本研究における子どもの「死」の概念形成の定義に関しては、Nagy (1948)、Piaget (1926/1954, 1964/1968) をはじめこれまでの調査研究の結果を踏まえ、「子どもの内面でアニミズムが消滅し、どの『いのち』もいつか終わりがあると現実的・客観的に認識できるようになること」と定義した。

本研究の目的

以上を踏まえ、本研究は、子どもの「死」の概念形成のきっかけとなった「出来事」の具体的な内容と経験年齢、その後の日常生活で「死」を現実的・客観的に意識している頻度を検証し、今後の死生に関わる教育に有効な知見を得ることを目的とする。

ただし、「死」に対して現実的・客観的な説明ができるとされる年齢にまで達していない子どもたちを対象に検証する場合、得られたデータに信頼性の面で課題が生じることが予想される。また、幼少期の子どもたちに「死」に関連する調査を行うことは、倫理上の問題を生じさせる恐れもある。さらに、最近になって身近な「死別体験」をした子どもがいる場合、Freud, S. が 'mourning work' と呼んだ「悲哀の仕事」(小此木, 1979)、つまり心のケアを最優先すべきで

ある。そこで、Nagy (1948) が子どもたちはおおよそ9歳以上になると「死」に対して現実的・客観的な認識を持ち始めると報告していること、Piaget (1926/1954, 1964/1968) が10歳前後までの子どもたちの心性としてアニミズムが認められると指摘したことなどを踏まえ、年齢が10歳以上で、「いのち」の有限性を認識するきっかけとなった「出来事」の記憶が新しいと考えられる小学校5, 6年の子どもを対象に、倫理上の配慮を十分に行いながら検証していくことにした。

方 法

調査協力者

首都圏内の公立小学校5校の5, 6年児童372名に質問紙調査を実施した。そのうち、回答に不同意だったものや不備のあったものを除外した295名(男子132名, 女子163名, 平均年齢11.5歳, 有効回答率79.3%)を分析対象とした。

調査期間

2019年7月に実施した。

調査手続き

集団記入式で質問紙調査を行った。各学級の担任教師が学級活動の中で実施し、その場で回収した。教示については、担任教師にフェイスシートを読み上げてもらうよう各校の校長へ依頼した。

倫理的配慮

調査は、筆者が所属する大学の研究倫理委員会の承認を得て行われた。回答は、無記名でどれがどのように答えたか分からないようになっていること、協力の自由、協力しない場合も不利益が生じないこと、回答の途中いつでも中止できること等、倫理的配慮を十分説明した上で同意書に賛同した者のみが回答できるようにした。

調査内容

『いのち』にはいつか終わりがある」と思ったり考えたりしたことを「1. 何回もあった」「2. 時々あった」「3. たまにあった」「4. 1回だけあった」「5. 全くなかった」の5件法により回答

を求め、1~4のいずれかを選択した場合、併せて「いつ頃（何歳位の頃）？」「どのようなことがきっかけで？」を問い、自由記述で回答を求めた。

分析方法

分析1 『いのち』にはいつか終わりがある』と思ったり考えたりしたことの頻度別回答数について、男女別、学年別、有無別（有：回答1~4、無：回答5）のそれぞれに有意な差があるかを、 χ^2 検定によって量的な面から分析した。

分析2 自由記述された文について、概念化、カテゴリー化によって質的な面から分析した。分析は、現実との適合性、理解し易さ、コントロールの容易さ等（木下、2003）を考慮し、グランデッド・セオリー・アプローチ（GTA）の手法を用いることにした。木下（2003）によれば、GTAは未だ完成された形にはなっておらず、概ね「オリジナル版」「ストラウス・コービン版」「グレーザー版」「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）」の4つに分化した状態にある。この中から、本研究は「修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）」の手法を援用した。理由は、M-GTAが他のGTAの理論特性や内容特性を満たしていること、「研究する人間」の視点を重視しつつ「分析ワークシート」を作成しコーディングを行いながらデータの意味を読み取っていくこと、解釈の多重的同時並行性を特徴としていること（木下、2003）から、最も相応しいと考えたからである。さらに、角南（2013）、小林・伊藤（2016）のM-GTAを用いた分析手続きを参考に「データ分析の基本構想」を立案し実施することにした。なお、「概念化」においては、児童が自由記述した文は短文が多かったため、概念への変換に当たっては、その記述によって児童が伝えようとしている意図や気持ちを汲み取りつつ、「データに密着していること（grounded on data）」（木下、2003）を心がけ分析に当たった。得られた各概念を下位カテゴリー、カテゴリーへと統合し、教育心理学と発達心理学領域の博士課程大学院生6名によって概念化からカテゴリー化に至るまでの確認作業を行った。その後、新たな

データを加えてのカテゴリー適用と最終的なカテゴリーの統合を行い、同メンバー6名によるカテゴリーの最終確認を行った。

分析3 『いのち』にはいつか終わりがある』と思ったり考えたりしたことの頻度別回答数と分析2から得られた各カテゴリーをクロス集計し、両者に有意な差があるかを χ^2 検定によって量的・質的の両面から分析した。

結果

分析1の結果

『いのち』にはいつか終わりがある』と思ったり考えたりした頻度別回答数と比率（%）をTable 1に示す。頻度別回答数についてクロス集計により χ^2 検定を行った結果、男女別でやや有意な差が認められた（ χ^2 （4, $N=295$ ）=12.16, $p < .05$ ）。男子は「何回もあった」「時々あった」の傾向が強いが、女子は「たまにあった」の傾向が強く、男子の方が女子に比べ有意に『いのち』にはいつか終わりがある』と思ったり考えたりする頻度が高くなる傾向が見られた。一方、学年別では有意な差は認められなかった（ χ^2 （4, $N=295$ ）=7.43, $n.s.$ ）。さらに、「1回以上あった群」（回答1~4: $N=260$ 名, 88.1%）と「全くなかった群」（回答5: $N=35$ 名, 11.9%）の2群に分けた有無別の回答数についてクロス集計により χ^2 検定を行った結果、両者に有意な差が認められた（ χ^2 （1, $N=295$ ）=295.00, $p < .001$ ）。有効回答者数の計295名のうち、小5、6（11~12歳）に達した子どもの9割近くが、これまでに「いのち」の有限性について思ったり考えたりした経験が1回以上あったことが示された。

分析2の結果

『いのち』にはいつか終わりがある』と思ったり考えたりした「きっかけ」について記述された一文ずつを、着目点と概念内容に関する解釈を行いつつ概念化した結果、27の概念が得られた。これら27の概念について、下位カテゴリー化、カテゴリー化への作業を行った結果、14の下位カテゴリーと6のカテゴリーが得ら

Table 1

『いのち』にはいつか終わりがある」と思ったり考えたりした頻度別回答数と比率

学年・性別 (n)	1. 何回も	2. 時々	3. たまに	4. 1回だけ	5. 全くなし	計
小5 男児 (63)	23 (36.5)	13 (20.6)	10 (15.9)	8 (12.7)	9 (14.3)	63 (100)
女児 (67)	17 (25.4)	10 (14.9)	21 (31.3)	13 (19.4)	6 (9.0)	67 (100)
小6 男児 (69)	24 (34.8)	21 (30.4)	10 (14.5)	5 (7.3)	9 (13.0)	69 (100)
女児 (96)	26 (27.1)	22 (22.9)	30 (31.3)	7 (7.3)	11 (11.4)	96 (100)
計	90 (30.5)	66 (22.4)	71 (24.0)	33 (11.2)	35 (11.9)	295 (100)

注) ()内は学年別・男女別の合計人数に対する比率 (%)。

れた。各カテゴリーに含まれる人数比率を算出し、各カテゴリーにおいて児童が初めて経験した年齢とその平均年齢を確認した (Table 2)。「きっかけ」を最初に経験した年齢を低い順に見ると、経験年齢が最も低かったのは「死生体験」の3歳、次が「生き物との触れ合い」の5歳、次いで「人との関わり」「マスメディア」「自らの発想」の6歳、最も年齢が高かったのは「学校教育」の7歳であった。また、これらを人数比率の大きい順に見ると、最も大きかったのは「死生体験」(30.2%)であり、次いで「マスメディア」(12.5%)、「自らの発想」(10.9%)、「学校教育」(6.1%)などが続いた。記述が無かったかまたは記述内容が不明瞭だったため概念化できなかった回答者を「不明」とし、合計数を算出したところ67名(22.7%)となった。当初から「全くなかった」の回答者も含めた全体の人数比率を Figure 1 に示す。

次に、Table 2 に示した結果について、カテゴリー別に経験年齢の範囲と各年齢に当てはまる人数・比率を示す図を作成した (Figure 2)。さらに、すべてのカテゴリーを通して経験年齢別に人数比率を算出した結果、割合が最も高かったのは10歳(15.6%)、次いで9歳(10.8%)、8歳(6.4%)と続き、最も低かったのは4歳(0.0%)となった (Figure 3)。これらのことから、「いのち」の有限性を思うきっかけとなる「出来事」を経験する子どもの人数は、早ければ3歳から、全体では5歳から徐々に増加し10歳でピークに達することが明らかになった。

分析3の結果

分析2から得られたそれぞれのカテゴリーに

ついて、『いのち』にはいつか終わりがある」と思ったり考えたりした頻度別回答数と人数比率を算出した (Table 3)。次に、人数比率についてカテゴリー間の頻度に差があるかを検証するため、各カテゴリーの「何回もあった」「1回だけあった」の人数比率を他のカテゴリーの「何回もあった」「1回だけあった」の人数比率とそれぞれ対比させ、クロス集計により χ^2 検定を行った。その結果、「学校教育」が他の5つのカテゴリーとそれぞれ有意に差があることが示された (「死生体験」: ($\chi^2(1, N=98) = 50.03, p < .001$), 「生き物との触れ合い」: ($\chi^2(1, N=117) = 45.00, p < .001$), 「人との関わり」: ($\chi^2(1, N=95) = 44.40, p < .001$), 「マスメディア」: ($\chi^2(1, N=94) = 61.70, p < .001$), 「自らの発想」: ($\chi^2(1, N=97) = 64.62, p < .001$)。これらのことから、「死生体験」「生き物との触れ合い」「人との関わり」「マスメディア」「自らの発想」の5つのカテゴリーのいずれかに含まれた子どもは、『いのち』にはいつか終わりがある」と思ったり考えたりした回数が、「学校教育」に含まれた子どもより有意に多いことが明らかになった。一方、「学校教育」に含まれた子どもは、『いのち』にはいつか終わりがある」と思ったり考えたりした回数「何回もあった」の比率が5.6%と有意に低く、半数近く(44.4%)が「1回だけあった」と回答した。これにより、子どもが『いのち』にはいつか終わりがある」と思ったり考えたりする回数が、「学校教育」では他の5つより有意に少ないことが示された。

Table 2

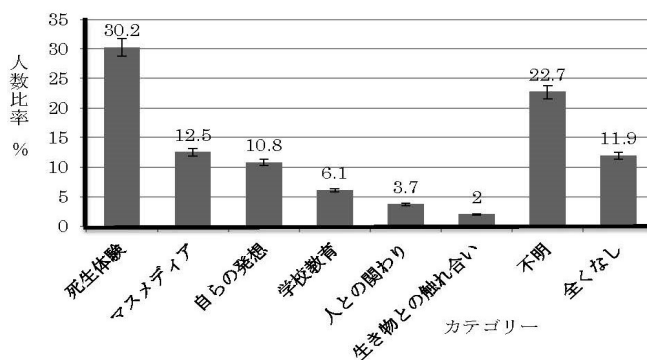
『いのち』にはいつか終わりがある」と思ったり考えたりするきっかけとなった「出来事」のカテゴリー・
 下位カテゴリー・概念と各人数・比率・経験年齢幅及び平均年齢

カテゴリー	下位カテゴリー	概念	n	(%)	経験年齢幅(歳)	経験平均年齢(歳)
死生体験	身近な死を体験	身近な人の死を経験	89	(30.2)	3-11	8.2
		身近な生き物の死を経験			(3-11)	(8.0)
		人づてに聞いた他人の死			(8-10)	(9.3)
	身近な生を体験	身内に新たな生命誕生			(5)	(5.0)
		身近な人が病気・怪我			(7-11)	(9.0)
身の危険を実感	身の危険を感じた経験	(7-10)	(8.0)			
マスメディア	テレビ視聴	心に残るテレビ番組を視聴	37	(12.5)	6-11	9.0
		ニュースで知った事件や有名人の死			(7-11)	(9.2)
	映画鑑賞	心に残る映画を観た			(6-11)	(9.1)
本・漫画を読む	「生死」を考えさせる本を読む	(9)	(9.0)			
			(6-11)	(8.5)		
自らの発想	自発的な疑問・感情	自発的な疑問	32	(10.8)	6-12	8.9
		死ぬことに対する嫌悪感・恐怖感			(6-12)	(9.0)
		つらいことを体験			(6-9)	(7.4)
	「死」に関する夢	(8-11)			(9.8)	
ゲームをしている時	ゲームをしている時「死」を考える	(7-12)	(9.8)			
			(10)	(10.0)		
学校教育	授業での学習	道徳の授業での教材・話	18	(6.1)	7-11	9.7
		各教科の授業での教材・話			(9-11)	(9.8)
		「いのち」の歌			(7-11)	(9.7)
		「いのち」の歌の歌詞を理解			(9)	(9.0)
人との関わり	身近な人との語らい	親から聞いた話	11	(3.7)	6-10	8.2
		友人との語らい			(6-9)	(7.2)
		身近な人から喪失体験を聞く			(9)	(9.0)
	人とのトラブル	戦争の話聞く			(9)	(9.0)
		親とのトラブルを経験			(7)	(7.0)
友人とのトラブルを経験	(8)	(8.0)				
			(9-10)	(9.8)		
生き物との触れ合い	動物との触れ合い	動物を身近に見た経験	6	(2.0)	5-9	6.2
		身近な昆虫から攻撃される			(5-6)	(5.3)
		虫を殺した経験			(9)	(9.0)
			(6)	(6.0)		
			全体	193	(65.4)	8.6

注) カテゴリーは人数比率の大きい順。人数比率は総数 (N=295) に対する割合。「全くなし」の回答以外に無記入もあったため、各カテゴリーの合計人数は総数と一致しない。

Figure 1

『いのち』にはいつか終わりがある」と思ったり考えたりするきっかけとなった「出来事」のカテゴリー別人数比率



注1) 数字は全児童 (N=295) に対する割合 (%)。

注2) エラーバーはパーセンテージを示す。

Figure 2

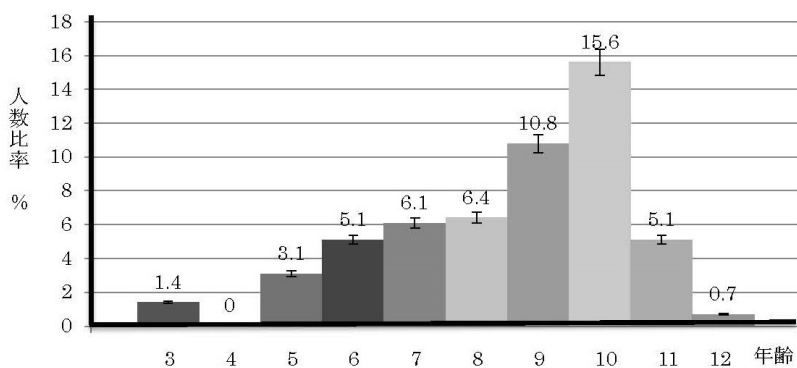
『いのち』にはいつか終わりがある」と思ったり考えたりするきっかけとなった「出来事」の 카테고리別・年齢別人数・比率と経験年齢範囲

年齢 (学年) カテゴリー	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳 (小1)	8歳 (小2)	9歳 (小3)	10歳 (小4)	11歳 (小5)	12歳 (小6)
死生体験 (30.2)	4 (1.4)	0 (0.0)	7 (2.4)	4 (1.4)	8 (2.7)	14 (4.7)	6 (2.0)	18 (6.1)	8 (2.7)	
生き物との触れ合い (2.0)			2 (0.7)	2 (0.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.3)			
人との関わり (3.7)				2 (0.7)	1 (0.3)	1 (0.3)	4 (1.4)	1 (0.3)		
マスメディア (12.5)	4 (1.4)			3 (1.0)	1 (0.3)	8 (2.7)	12 (4.1)	3 (1.0)		
自らの発想 (10.8)	3 (1.0)			5 (1.7)	3 (1.0)	7 (2.4)	9 (3.1)	1 (0.3)	2 (0.7)	
学校教育 (6.1)					1 (0.3)	0 (0.0)	6 (2.0)	6 (2.0)	3 (1.0)	

- 注1) カテゴリーは、最初に経験した年齢の低い順。
- 注2) 人数比率は全児童 (N=295) に対する割合 (%)。
- 注3) 矢印は経験年齢範囲を示す。

Figure 3

『いのち』にはいつか終わりがある」と思ったり考えたりするきっかけとなった「出来事」全体の経験年齢別人数比率



- 注1) 数字は、全児童 (N=295) に対する割合 (%)。
- 注2) 3~8歳 : n=66 (22.4%), 9~12歳 : n=95 (32.2%)。
- 注3) エラーバーはパーセンテージを示す。

Table 3

『いのち』にはいつか終わりがある」と思ったり考えたりするきっかけとなった「出来事」の各カテゴリーにおける頻度別回答数と比率

カテゴリー	1. 何回も	2. 時々	3. たまに	4. 1回だけ	計
死生体験	36 (40.4)	24 (27.0)	22 (24.7)	7 (7.9)	89 (100)
マスメディア	15 (40.5)	9 (24.3)	12 (32.4)	1 (2.7)	37 (100)
自らの発想	14 (43.8)	14 (43.8)	3 (9.4)	1 (3.1)	32 (100)
学校教育	1 (5.6)	5 (27.8)	4 (22.2)	8 (44.4)	18 (100)
人との関わり	4 (36.4)	2 (18.2)	4 (36.4)	1 (9.1)	11 (100)
生き物との触れ合い	3 (50.0)	0 (0.0)	2 (33.3)	1 (16.7)	6 (100)
計	73 (37.8)	54 (28.0)	47 (24.4)	19 (9.8)	193 (100)

注1) ()内は各カテゴリーの合計人数に対する人数比率 (%)。

注2) 無記入があったため、合計人数は総数と一致しない。

考 察

分析1の結果について

『いのち』にはいつか終わりがある」と思ったり考えたりした頻度に男女差が見られ、男子の方が女子よりも「いのち」の有限性を思う頻度が有意に高かったことから、アニミズムが男子では薄れているが女子では残存している可能性が推測された。この点は、佐藤・齋藤(1999)が報告したこととほぼ一致する。一方、学年差が認められなかったことについては、Nagy(1948)が子どもたちはおおよそ9歳以上になるとそれまでのアニミズムが薄れ「死」に対して現実的・客観的な認識を持ち始めると報告していること、Piaget(1964/1968)が11, 12歳から15歳ごろまでの「形式的操作期」になると具体物から離れ抽象的に考えられるようになるとの仮説を立てたこと、さらに東京都立教育研究所(1983)が「生命は有限である」という考え方は小2以降において確立することが推測されたと報告していること等を踏まえると、小5, 6年(11~12歳)の段階で学年差が認められなくなるのは成長過程における一般的な現象だと考えられた。

「いのち」の有限性に関する認識の有無別では、2群間に有意差が認められ、小5, 6年の9割近くがこれまでに「いのち」の有限性について思ったり考えたりした経験を1回以上有していることが示された。この結果は、現代の子どもたちの多くが「現実の死」を客観的に認識し

ていることを示すものであった。一方、残りの約1割の子どもたちは、これまでに一度も「死」を思ったりした経験が無いことも示された。前者の約9割の子どもたちと後者の約1割の子どもたちの認識の違いを、我々は何のように受け止めるべきであろうか。これは、個人差に関わる課題の1つと考えるべきものであり、「死」を扱う教育では特に慎重に対応する必要があるため、総合的考察において改めて述べることにする。

分析2と分析3の結果について

得られた6つのカテゴリーについては、「学校教育」を除く5つのカテゴリーで、小学校入学以前から体験している子どもの存在が示された。つまり、子どものおおよそ3人の内2人(65.4%)は、早ければ3歳から、遅くとも小6(12歳)に至るまでに、身近な人や生き物の死に遭遇したりする機会があり、それをきっかけに「いのち」にはいつか終わりがあると気づき始めることが明らかになった。特に3歳という幼い年齢で「死生体験」に遭遇した子どもは、体験当時は漠然とした「出来事」だったかも知れないが、その子なりに「いのち」の終わりについて記憶に残るきっかけとなったことが推察された。また、このように具体的な体験が無くても、約10人に1人(10.8%)は6歳から小6に至るまでに「自らの発想」によって、「いのち」にはいつか終わりがあると思いはじめたことも明らかになった。「自らの発想」に含まれた回答には、「父母が死んだらいやだと考えた」など具体

的に「死」をイメージした記述と、「ふと思った」など抽象的な記述があった。このように思った背景には、「死」に関連する何らかの「出来事」が実際にあり、本人が気づかない内に記憶に残った可能性も否定できないと思われた。

一方、「学校教育」で示された経験年齢を見ると、最初に経験した年齢が6つのカテゴリの中で最も遅い7歳であり、人数比率も比較的低い6.1%であった。このことから「学校教育」は、それまで「死生体験」などに遭遇する機会の無かった子どもたちにとって、「いのち」の有限性を知る上で重要な役割を果たしていると思われた。しかし、「いのち」の有限性を感じた頻度では、「学校教育」における「1回だけ」が他の5つのカテゴリに比べ有意に高かった。つまり、「学校教育」によって初めて「いのち」の有限性について考える機会が与えられた子どもは、そのように考えることが一過性となる可能性が高いと推測された。「学校教育」では、子どもの記憶に確実に留まる「いのち」の教育の在り方が課題となることが示唆されたと言える。

総合考察

本研究は、子どもの「死」の概念形成のきっかけとなった「出来事」の具体的な内容と経験年齢、その後の日常生活で「死」を現実的・客観的に意識している頻度を検証し、今後の死生に関わる教育に有効な知見を得ることを目的とした。

まず、子どもが「死」を意識する頻度に関しては、次のことが考えられた。現代の子どもは「仮想死」と「現実の死」を明確に区別できなくなっているとの指摘があったが、実際は小5、6年の9割近い88.1%が「いのち」の有限性を認識していることが明らかになった。男女別では、男子の方が女子よりも「死」を思ったり考えたりする頻度が有意に高かった。この点はアニミズムによる影響が考えられたが、この他に「生まれかわり」思想との関係も推察された。「生まれかわり」思想は、中学校段階になると「ほかのものに生まれかわる」などの比率が増

加し、その比率は男子よりも女子に高いこと(東京都立教育研究所, 1983)、中学生の「死後の世界」の認識で「何もかも消えてしまう」との回答は男子で高かったが女子は「天国に行く」と回答した者が多かったこと(小幡ほか, 2000)などが報告されている。これらは中学生を対象とした調査結果であったが、いずれも死後の世界に対して男子よりも女子の方が主観的な思いを抱いている傾向がうかがえた。このような傾向は、年齢が中学生に近い小5、6年においても見受けられる可能性は高いと推測された。つまり、女子に比べ男子の方が「いのち」の有限性の認識が有意に強い傾向が確認されたが、その要因の1つに女子は「生まれかわり」思想の影響を受ける傾向が強いこともあり得ると考えられた。

次に、これまでに「いのち」の有限性を認識したことが無い約1割の子どもたちは、幼少期から「死生体験」「マスメディア」「自らの発想」などの機会が全く無かったと考えられた点である。今後、中・高校へと進む過程で、何らかの「出来事」に遭遇する可能性は予想されるが、高校卒業までに92.7%が「死別体験」を有しているとの報告(加藤・庄司, 2018)を考慮すると、逆にそのような機会を全く得られないまま成長していく子どもが7~8%存在する可能性も推測される。このような子どもに対して、学校や家庭はどのように対応すべきか。現実の「死」を全く認識しないまま成長している子どもに対し、敢えて「死」を教えること、いわゆる「寝た子を起こす」ことの是非が問われることになる。現実の「死」を知ることによって、平穏な心が乱れ、不要な不安感・嫌悪感を抱いてしまう危険性も危惧される。しかし、前述のように我が国では、毎年のように大規模な自然災害が発生しており、幾多の尊い人命が失われている。誰もが、いつ身近な人を喪失するか分からない状況であり、自分自身が犠牲者になる可能性もある。その一方で、「人を殺してみたい」という動機で殺傷事件を引き起こす青少年がいる。自死する小中高校生もいる。このような状況に至るのはごく限られた一部の子どもだけか

も知れないが、幼少期から現実の「死」を知る機会が無かった境遇も推察される。こうした事態を招かないためにも、すべての子どもが現実の「死」を認識し、かけがえのない「いのち」を尊重する心情・態度を身につけるよう何らかの働きかけが必要である。学校や家庭で、発達段階に応じた意図的・計画的な「いのち」の教育を進めていく必要があると考える。

さらに、「死」の概念形成のきっかけとなる「出来事」を経験した年齢に関して、次のことが考えられた。具体的な「出来事」の内容と経験時期について、記述できなかった（記憶していなかった）子ども（22.7%）を除くおおよそ3名の内2名（65.4%）が、「出来事」の経験年齢を記述した。しかし、記述された年齢に関して、信頼性の面で課題があることも危惧された。特に、「死生体験」に含まれた4名（1.4%）が記述した「3歳」という年齢は、主観的な空想によるものなのか、あるいは真に確実な記憶に基づくものなのか疑念が残った。この疑念の背景には、Nagy（1948）やPiaget（1926/1954, 1964/1968）が9歳または10歳前後までの子どもにアニミズムが認められると指摘していることもあった。そこで、アニミズムが消滅する年齢を9歳と仮定した場合、本調査で9歳以降の「出来事」を挙げた子どもは計95名（32.2%）、8歳までの年齢を記述した子どもは計66名（22.4%）となった（Figure 3）。各年齢における人数比率は、3歳以降、4歳を除き10歳に至るまで増加曲線を描いた（Figure 3）。アニミズムが消滅していないとされる8歳以前の66名の「出来事」を、「死」の概念形成のきっかけだったと捉えることは可能なのか。仮に「3歳」で実際に「死生」に関わる出来事を経験していたとしても、当時は出来事の意味さえ全く分からなかったはずである。

しかし、幼少期に「死生」に関わる「出来事」を経験し悲嘆の状況に置かれた子どもは、その断片的な情景が記憶に残ったことも推察された。9～10歳へと成長してから、その「出来事」の記憶が蘇り、「いのち」の有限性を認識するきっかけだったと客観的に理解できるようになった、

と捉えることも可能と思われた。また、3歳～10歳の経験年齢の人数比率が年齢とともに増加曲線を描いたが、これを子どもが経験する「出来事」が年齢とともに増加すると解釈することはできない。この増加曲線は、昔の記憶より新しい記憶の方が容易に思い出せることを示すものである、と解釈する方が妥当と考えられる。したがって、記憶に残った強さの視点から推察すると、一部の子どもは「3歳」頃に残った記憶が強烈だったため11～12歳に至ってからも思い出すことができた、と捉えることは可能だと思われた。さらに、子どもによっては、成長過程で経験する「出来事」は最初の1回だけとは限らず、類似した「出来事」を複数経験していることも十分あり得る。複数経験した「出来事」の中で、「3歳」頃のもの、『いのち』にはいつか終わりがある」と思う最初のきっかけだった、と改めて認識した可能性も考えられる。このように見ると、たとえ「出来事」の経験年齢の記憶が「3歳」だったとしても、その年齢の信頼性を全面的に否定することはできないと考えられた。

最後に、「いのち」の有限性を感じた回数に関して、6つのカテゴリーの中で「学校教育」の「1回だけ」が有意に高かった点についてである。これは、学校における「いのち」の教育が、子どもたちの記憶に確実に留まるものではないことを示唆していると考えられた。そこで、ここではNagy（1948）の指摘に基づく「死」の「不動性」「不可逆性」「普遍性（不可避性）」の各視点から、現代の子どもの「死」に対する認識の課題と「学校教育」の方向性を考えてみる。まず「不動性」に関する課題として、現代の子どもが目にするドラマや映画などの中で人間や動物の「死」が「不動性」によって示されていることが挙げられる。現実の「死生体験」がこれまで一度も無かった子どもにとって、「死」とは活動が停止すること、つまり「不動性」のみだと勘違いしてしまう可能性も考えられる。言うまでもなく、ドラマや映画などに映し出される「不動性」はその場限りの「仮想死」（西本、2000）であり、番組終了後は「生き返る」もの

である。現実の「死」を知らない子どもは、「仮想死」と現実の「死」を混同し、どちらもやがて「生き返る」と思い込んでしまう可能性も否定できない。したがって、子どもが現実的・客観的な「死」を認識するには「不動性」のみでは不十分であり、「不可逆性」の認識も必要となる。実際に身近な現実の「死」に直面した人々は、悲嘆の状況に陥ることが多い。それは、一度失われた「いのち」は決して元に戻らないこと、つまり「死」には「不可逆性」が必然であることを、人々は認識せざるを得ないからだと考えられる。故に、子どもが「死」を現実的・客観的に認識するためには、「不可逆性」の認識も必要不可欠だと言える。さらに、本調査で取り入れた「普遍性（不可避性）」の認識も必要である。「死」の「普遍性（不可避性）」を認識することは、他の「いのち」だけでなく、自分自身の「いのち」も決して例外でないことを認識することでもある。「普遍性（不可避性）」を認識することにより、すべての「いのち」を慈しみ尊ぶ心を抱くようになることも考えられる。このように「死」の「不動性」「不可逆性」「普遍性（不可避性）」のそれぞれを子どもに認識させることは、学校で「いのち」の教育を進めていく上で重要な点であると言える。ただし、教育において「死」を扱う場合、子ども一人一人が置かれている状況や環境、これまでの経験、発達段階などに留意し、倫理的配慮を十分に行いながら慎重に進めることが大切である。

本研究の課題は、次の2点である。1つは、調査対象の年齢の幅をさらに広げ、発達段階別にアニミズムや「生まれかわり」思想も含めた「死」の概念形成の実態を検証する必要があることである。年齢の幅を小学生から高校生まで広げることにより、発達段階の視点から「死」の概念形成をより詳しく解明できることが期待される。2つ目は、「死」の「不動性」「不可逆性」「普遍性（不可避性）」の3つの考え方のうち、本調査では倫理上の配慮から「普遍性（不可避性）」に限定した点である。今後は、倫理上の課題に充分配慮した上で、「不動性」「不可逆性」も含めた幅広い検証を行い、「死」の現実的・

客観的な認識のさらなる探究を進める必要がある。

引用文献

- 平山正実 (1985) . 生と死の教育—とくに生涯教育の中で 樋口和彦・平山正実 (編) 生と死の教育—デス・エデュケーションのすすめ (pp.144-170) 創元社
- 平山正実 (2000) . 人はどう死の恐怖を克服してきたか—死生学の射程 AERA MOOK 死生学がわかる (pp.57-67) 朝日新聞社
- 廣井亮一 (2006) . ゲームやネットが子どもの死生観に与える影響—佐世保小六事件から考える 児童心理, 60(10), 897-902.
- 伊藤 博 (2004) . 4才児から9才児までの死生観に関する意識調査—生命の有限性の認識を中心として 日本教育心理学会総会発表論文集, 46(0), 255.
- 梶田叡一 (2006) . 「いのち」を大切に作る心—実感的理解を深める 児童心理, 60(10), 866-874.
- 加藤良則・庄司一子 (2018) . 'Death Education' における 'teachable moment' の可能性—身近な死に遭遇した児童・生徒への教師の対応の検討を通して 筑波大学大学院教育研究科修士論文 (未刊)
- 勝俣暎史 (2005) . 若者の死生観 教育と医学, 53(624), 523-529.
- 木下康仁 (2003) . グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い 弘文堂
- 小林朋子・伊藤未来 (2016) . 大切な人を亡くした子どもに対する教師のとまどいとその対応について 静岡大学教育学部 (編) 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会・自然科学編, 66, 55-67. <https://doi.org/10.14945/00009519>
- 宮川俊彦 (1987) . 600万の自殺予備軍—追いつめられた子ども達 誠文堂新光社
- 文部科学省 (2020) . 令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果について <https://www.mext.go.jp/content/1422020.pdf>

f

- 文部科学省 (2021) . コロナ禍における児童生徒の自殺等に関する現状について
<https://www.mext.go.jp/content/20210216.pdf>
- Nagy, M. (1948) . The child's theories concerning death. *The Journal of Genetic Psychology*, 73 (1) , 3-27.
<https://doi.org/10.1080/08856559.1948.10533458>
- 仲村照子 (1994) . 子どもの死の概念 発達心理学研究, 5, 61-71.
- 西本義之 (2000) . 「死」を考える学習—地域の実情に合わせて 現代のエスプリ 394 (pp.48-57) 至文堂
- 小幡セイ・入谷仁士・木村龍雄 (2000) . 中学生の「生」と「死」の意識に関する研究 高知大学教育学部研究報告, 1 (59) , 13-35.
- 小此木啓吾 (1979) . 対象喪失—悲しむということ 中央公論社
- Piaget, J. (1926) . *La représentation du monde chez l'enfant*. (ピアジェ, J. 大伴茂 (訳) (1954) . 臨床児童心理学Ⅱ 児童の世界観 同文書院)
- Piaget, J. (1964) . *Six études de psychologie*. (ピアジェ, J. 滝沢武久 (訳) (1968) . 思考の心理学—発達心理学の6研究 みすず書房)
- 佐藤比登美・齋藤小雪 (1999) . 現代の子どもの死の意識に関する研究 小児保健研究, 58, 515-526.
- 角南なおみ (2013) . 子どもに肯定的変化を促す教師の関わりの特徴—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成 教育心理学研究, 61 (3) , 323-339.
<https://doi.org/10.5926/jjep.61.323>
- 東京都立教育研究所 (1983) . 昭和 57 年度 子供の「生と死」に関する意識の研究 東京都立教育研究所相談部児童生徒研究室, 1-15.

Study of 'Events' Triggering the Concept of Death in Children

Yoshinori KATO

Ichiko SHOJI

The purpose of this study was to clarify the frequency of children's awareness of death realistically and objectively in daily life, and verify the specific contents and age of experiencing events that trigger this concept. The formation of the concept of death in this study referred to the disappearance of animism from the child's understanding, and recognition of finite life. The study was conducted on children in the 5th and 6th grades of elementary school ($N=372$) by verifying the frequency of recognizing the finiteness of life, the event, and the age when an experience triggered the concept. As a result, in the frequency of recognizing finiteness, the gender difference was observed and the frequency of nearly 90% was more than once. Six categories were obtained and some children had experienced at least one of them before entering elementary school. However, the opportunity to think about the finiteness of life given by school education might be transient.